

奈良言友会会報

まほろば



曾爾高原

第22号

平成29年10月発行

第6回 ことばの親子交流会 報告

天羽 郁子

2017年7月23日、奈良言友会主催の「第6回ことばの親子交流会」が、国立曽爾青少年自然の家で開催されました。第1回目から5回目までは、生駒山麓公園で行っていましたが、今回は、市田さんのご提案ご尽力で、曽爾高原の雄大な自然の中での開催となりました。市街地から遠いことや開催日が夏休みに入っ
てすぐということもあり、参加者が集まるか心配しましたが、子どもたち17人、保護者15人、ボランティア15人、言友会メンバー10人とたくさんの参加がありました。さらに、第1回目から参加してくれていて、中学生になってからはスタッフとして活躍してくれていたKさんとお母さんが、高校の終業式が終わってから、駆けつけてくれました。子どもたちがKさんのような頼もしく優しい先輩に出会ってくれたことも、うれしいことでした。

午前中は、保護者の方々は研修会、子どもたちは子ども同士の活動という、基本のプログラムは今まで通りですが、子どもの活動が、ハイキングとフィールドアスレチックとどちらかが選べるようにしました。フィールドアスレチックのコースは、ゴールまで13の施設ですが、生駒山麓公園にはない「円盤飛行」「曽爾高原飛行」などのスリルある飛行ができるものや、みんなで力を合わせないとクリアできない「丸太ころがし」や「丸太つきあげ」や「長げたすすみ」があり、年齢別に分けた4班それぞれがグループで協力し、言友会のメンバーやボランティアの通級指導教室の先生たち、言語聴覚士をめざす青丹学園の学生さんたちのサポートを受け、全員がゴールまで到達することができました。余力のある5年6年の高学年グループは、おもしろい施設は二度三度とチャレンジしていました。



交流会閉会后に、またフィールドアスレチックに行った子もいました。ハイキングコースは、当日病気のため参加できなかったお子さんがいたため、一組だけになりましたが、言友会メンバーのガイドで、ボランティアの青丹学園の学生さん、奈良市の保健師さんと一緒に、曽爾高原での虫取りも楽しみながらのゆったりした散策でした。高原ということもあって、暑さもそれほど厳しいものではなく、みんな元気に活動できました。こどもグループの野外活動

の一方、保護者のみなさんは屋内で保護者同士、交流する機会をもちました。三つのグループに分かれ、それぞれのグループに言友会のメンバーとことばの教室の先生が入って進めました。保護者の方々は日頃、家庭での子どもとの関わり方で不安に思ったり、また子どもの学校での生活で気がかりに思うことなどを、率直に出し合っ
て、親同士意見を交換したり、ことばの教室の先生からの意見も出され、熱心に話し合いました。保護者の方からはお互いの悩み事を話し合えてよかった、他の方も自分と同じことで悩んでいることを

知って気持ちが楽になった、言友会の当事者の話がためになったなどの感想が聞かれました。グループに分かれた話合いが一段落ついたところで、話し合われたことをグループ毎に発表しました。また、話合いの合間に、言友会のメンバーによるヨガの実習をしましたが、緊張がほぐれましたと好評でした。

午前中の活動が終わって、活動グループごとに食堂に行き、バイキング形式での昼食、自分たちで好きなものをチョイスできて、のびのび・わいわいかやかや楽しい食事でした。が、保護者グループからの「野菜とってない!」「好きなシューマイ何個食べるの!」という心配の視線も感じられました。昼食が食堂での食事ということで、午後のプログラムに余裕ができたため、子どもたちの自己紹介ビンゴゲーム、奈良言友会会員の体験発表、子どもたちのフーセンバレーゲームと充実したものとなりました。自己紹介ビンゴゲームは、三島さんのご提案進行で、「すきなたべもの」「すきなスポーツ」「なりたいもの」を、子どもたちがビンゴカードに記入、三島さんが発表したものと同じならビンゴというゲーム。お菓子の景品もあり、盛り上がったことはいうまでもありませんが、午後からの席は親子で座ってもらったので、子どもの思いや考えていることを、保護者の方に知ってもらう機会にもなりました。

奈良言友会会員の体験発表、子どもたちがじっと聞けるのか心配しましたが、子どもたちも、田中さん澤辺さんのお話をしっかり聞くことができていました。澤辺さんは、中学高校と弓道部で一生懸命活動したことにより、自信となり成果もあげられ、ご自身が変わることができたという体験を話してくださいました。高学年の児童の参加が多かったので、中学に向けての力強いアドバイスになったと思います。また、田中さんは、ご自身が人生のそれぞれの時期で、自分の好きなことを見つけ、それに打ち込んでこられたことにより、充実した豊かな生き方ができたのではと、未来ある子どもたちに、素敵なメッセージを送ってくださいました。お二人の体験談は、私たち大人だけでなく、子どもたちの心に響くものでした。最後は、子どもたちを3チームに分け、椅子に座ったままのフーセンバレー。子どもたちは思いのままに飛んでくれない、ふんわりフーセンに苦戦苦闘! 見ている大人たちも応援に力が入りました。交流会の最後のプログラムが楽しいフーセンバレーで終わったことにより、解散後のみなさんの顔がにこやかだったように思いました。

奈良言友会の少ないメンバーでの行事開催は、負担も大きいことと思いますが、「吃音のある子どもたちのために」という思いで毎年続けられている「ことばの親子交流会」が、子どもたちや保護者の方々の支えとなり、明日を生きる力になっていることを、通級指導担当者は、指導の中で強く感じ、感謝の思いでいっぱいです。



例会報告

5月14日(日) 13:30~16:30 これまでの吃音の経緯と体験談

参加 12名 担当・報告 澤辺 佑一

S58(1983年)7.31 天理市生 これが僕の誕生日です。僕は1300gの未熟児で生まれ、1か月位保育器に入ってたそうです。本当の誕生日は8/24位だったそうです。小1の11月位に大火傷をしますが、それまでの性格はわんぱくで社交的でしたが、この火傷で3月末まで自宅休養を余儀なくされ、勉強は自宅でたまに先生が持ってくる小テストのプリントをしていました。自宅生活が中心のためか、性格も内向的になり、人ともあまり接しなくなりました。

小2の4月から学校生活を再開しますが、この火傷が原因のいじめを受けます。「きもい」「妖怪」だの、そして無視、触れるものなら「洗わんと腐る」「消毒せな」等そしてしばらく自宅生活で人との交流がなかった為か、この頃が一番吃音がひどかったと思います。その為僕のしゃべり方を真似してからかわれたりしました。でも歌の時間だけは吃音が出なかったので唯一気が休まりました。みんなの前で見本として歌わされた事もありました。小5、6年になってくると、人との会話も増えてきたのか吃音はあまり出なくなりました。でも火傷の診察で病院に行くこともあり、学校を遅刻・早退等がたまにあった。その度にかかわれた。

小3・4・5年の夏休みを利用して火傷の手術をした。小6の時に近所のお兄さんと枝と紐で作った弓で、缶当てみたいな遊びをしていた。その遊びが僕には面白過ぎてはまってしまった。そしてそれがきっかけで中学校では弓道部(天理市立南中学校)に入った。しかも天理市の中学校では、そこしか弓道部がなかった。僕は弓道と運命的な出会いだと思った。弓道が楽しくてしょうがなく、誰よりも練習をした。そのお陰で中2では団体ではあるが近畿大会、中3では全国大会に行くことができた。

中学校ではいじめも小学校の時程もひどくなく、吃音に対してのいじめに至っては0に等しかった。

高校でも弓道をしようと思い、自分に合った学力で弓道部がある高校を探し見つけた。その高校は王寺工業です。吃音で面接で苦戦するも何とか入学出来た。この学校は弓道はそこそこ強かったので中学の時とはレベルが全然違った。でも経験者だったので何とかレギュラーに入れた。そして団体で高1で近畿大会、高2で全国大会に出場できた。全国大会では予選通過をし、決勝トーナメント(ベスト16)まで進めた。高3では個人で学年別ではあるけど優勝をした。僕にとって高校生活が今までで一番充実していて楽しかったです。

大学に行き、就職して、吃音・火傷とこれから一生付き合っていくかなければならないけど頑張っていきたいです。

<参加者の感想>

- 例会は悩みを分かち合い、共有できる当事者同士の出会いの場であり、すばらしいと思います。当事者である私たちが、やりたいこと、求められることが形になるように、課題を抽出して、外に一步踏み出して、活動(行動)できればと思います。 T・T
- 久しぶりに吃音歴の話が聞けてよかったです。 M・G
- よく準備されて分かりやすかったです。小学生で性格が変わってしまった点は自分にも共通する点がありご苦労だったとされます。 I・H
- 澤辺さんがご自身のおいせちと吃音のことを話してくださいましたが、小学校2年生から火傷をされたこと、吃音と両方でいじめられ、辛い思いをされたとのことでした。その時、先生にもめくまれなかったとおっしゃったことが、教職にいた私にとっては、残念なことでした。せつかく先生として、その子を導くのですから、子どもの辛さを理解できる先生であってほしいと願うばかりです。 A・I
- ここ何回か例会で体験談を聞かせていただきましたが、共感や親近感、それに仲間意識のようなものが湧いてきたように思います。 H・S
- 今日は自分の出番で、うまく人前でしゃべれるから心配だったけど、なんとかうまくできたと思う。でも、みんなにうまく伝わっているかは不安です。自分の人生を振り返るいい機会でした。 S・Y
- 同じ悩みを持つ方々の感想を聞き、吃音に対する考え方の多様性を感じた。また、学校の先生方の温度差を感じ、思っていたとおりでありました。 U・F
- 澤辺さんのお話が自分とリンクしている部分があったので、とても親近感をもってお話を聞くことができました。 M・S
- 自分の生い立ちをたくさんの方の前で話すことは勇気が必要だったと思います。その勇気は今まで生きてきた、乗り越えてきた時間の積み重ねだと思えます。弓道も生きる自信となっているのですね。すばらしい!! T・H
- 体験談のあとに、数人のグループに分かれて、体験談を聞いての感想や気になることを言って、最後にグループごとで、出た意見を全体で発表する、という形式の方が、全員が考えをいえるのではないかと思います。 N・A
- 吃音のある人もない人も参加され、色々なお話が聞けてよかったです。 Y・A

例会報告

6月11日(日) 13:30~16:30 参加 16名(うち一般からの参加7名)

今回は多方面に活動しておられる八木智洋さんを招いて、2部に分けて行いました。

奈良言友会の例会ではかつてないほどの多くの参加者がありましたが、八木さんが出演したNHKEテレビ「バリバラ」を視聴したひとがほとんどで、八木さんの活動への関心の高さをうかがわせました。

第1部 八木さんによるからだことばのレッスン。

第2部 話し合い

からだことばのレッスンについて、学校や就職について、八木さんが取り組んでいる活動などについて話してもらい、参加者と話し合いました。

例会を担当して 八木 智大

からだことばのレッスンは、竹内敏晴という演出家さんがはじめたものです。からだの緊張をゆるめ、声や言葉の可能性を開くもので、言友会でもレッスンがされていました。今回はそのうち、からだをゆるめる「からだゆらし」のレッスンを前半にしました。ぼくは、竹内のところに通っていた瀬戸嶋充さんがしている「人間と演劇研究所」で、からだことばのレッスンを継続的に受けています。「からだゆらし」は型があって、もうそれを覚えているので、人に教えることができます。前半は、それを皆さんにお教えし、一緒にしました。

まずぶら下がりという、ひとりでする脱力からしました。次に、2人1組になってゆらしします。足だけでなく腕もやるフルコースです。教える側になると、伝えるために言葉にしようとして、受けているレッスンが自分の中で言葉として理解できる感覚がありました。ぼくは気功も長く続けているのですが、気功の先生が言っていることがからだゆらしでも当てはまることに、気がつきました。「ちいさな力で大きく回す」がこのレッスンで自分で言って、一番印象に残っている言葉です。

ただ、課題として、レッスンは気持ちいい楽しいのですが、だから何なのかが自分でもわかっておらず、そのため人にも伝えられませんでした。からだが気持ちいいということだけでは、人は納得しないのです。結局、竹内敏晴さんの本を読んでくださいとしか言えませんでした。その後発見があり、これはからだをゆるめることで、からだか持つ論理や知性が開くのを助けているのだとわかりました。これは大きな発見でした。レッスンの意味は、このようにやっていく中で見えてくるものなのだと思います。

後半はぼく自身のことを話しました。何を話すか決めていませんでしたが、ぼくが以前出演したバリバラ「吃音と向き合う」を見てくれた人がほとんどだったこともあり、小学校教員を目指すことになった理由と、目指さなくなった理由を語りました。バリバラでは小学校教員になりたいと話しましたが、結局どうしても試験勉強をする気になれず、目指すのはいったんやめたのです。文科省や教育委員会の言うことを聞きたくないとか、3ヶ月以上先のことは考えられないとか、かなり好きにしゃべりました。

合計で3時間で、終わるとくたくたでした。全力を使い切った感じです。いい集中ができました。好きな奈良言友会でレッスンをすることができ、大勢の方に来ていただき、光栄に思います。ありがとうございます。

例会余録 堀 茂

八木智大さんには、奈良言友会の例会やイベントに何度か参加してもらっていて、顔なじみですが、はじめて八木さんの話し方を聞いたとき、強い印象を受けました。

私自身のことを言えば、職場でどもりそうだと思うと、「言うべきか」「言わざるべきか」という葛藤に嵌っているうちに、タイミングを失って、結局、言わずじまいになることが多かった。ところが、八木さんは、まず言おうとする、そしてどんなにどもっても途中で止めずに言い切ります。音を出そうと必死になっている感じでなく、ありのままにどもっているという感じさえします。私にはそれがさわやかに感じられたのですが、「さわやか」などと、のん気なことでないことは、新朝45（2016.7月号）の近藤雄生氏の「吃音と生きる」と題する八木さんに取材したルポルタージュを読むと分かります。そこには、大学2年くらいの時に、1日350回くらい「死にたい」とつぶやいたとあるなど、深く悩み苦しんだことが記されています。中高一貫の学校では、「点数がなによりも重視される雰囲気の中で、彼の吃音が顧みられることは一切なく、・・・症状も悩みも深まっていった・・・」とあります。八木さんの学校教育への強い問題意識は、彼の、学校での体験から来ていると思います。

一方、八木さんは、その吃音をもちながら、中国や台湾の青年との交流に参加したり、演劇やダンスなど、いろいろなことに積極的にチャレンジしています。

八木さんのそのような姿勢に共感し、奈良言友会の例会で交流する機会を持ちたいと提案し、八木さんが積極的に受け入れてくださって、今回の例会になりました。

例会の当日、私は開始の1時間くらい前に会場にきましたが、すでに八木さんが来ていて、ひとり黙々と、机を脇に片付け、床のゴミなどをとるローラーで床をきれいにしておられました。この例会に寄せる彼の意気込みが感じられました。後半のトークがおわると、精根使い果たしたように見えました。

今回の例会の前半「ことばからだのレッスン」ですが、私自身は、若い頃、竹内敏晴氏の「ことばが拓かれるとき」を読んで啓発され、氏のワークショップを見学し、その後、言友会全国大会の分科会でも体験することができました。私はこのレッスンをほんの少し覗いたくらいで、よく分かりませんが、人と人の間にある垣根を外して、お互いの体を通して、気持ちを通じ合わせるものがあるように思いました。

今回の例会が、以前の私がそうであったように、どもることを怖れて、前に進むことに逡巡している人にとってのメッセージなればよいと思っています。



吃音人物誌その4 「田中 角栄」

山崎 貴浩

私が物心ついた時、総理大臣は佐藤栄作だった。ずっと佐藤さんだったので総理大臣は変わらないものだと思っていた。なんせ日本が明治18年に内閣制を敷いて以来、連続しての首相在任最長記録の7年半だったから子どもがそう思うのも無理はない。小学校5年生のとき、総理大臣が変わった。田中角栄が総理大臣になった。まだ54歳の若々しい、当時は初の大正生まれの総理大臣ということと、学歴が尋常高等小学校卒ということで「今太閤」ともてはやされたものだった。担任の先生はなぜか角栄さんが大嫌いで口を開くと彼の悪口を言っていた。今でも角栄さんを褒める人も多ければ、貶す人も多く、毀誉褒貶の激しい人である。概ね生身の角栄さんに接した人はその人間的な魅力の虜になってしまうようであるが、角栄さんに限らず政治家という人種は押しなべて魅力的な人が多いものである。政治家に問われるのは人格ではなく識見ではなからうか。角栄さんは「日本列島改造論」という本を出版し、その本はベストセラーとなって列島全体が狂乱物価といわれるほど値上がりを見せたのだが、今あらためて「日本列島改造論」を読み返すとその発想は政治論文というよりはむしろSFに近い感じである。さて、田中内閣が登場し、角栄さんが「今太閤」ともてはやされていたとき、少年漫画（サンデーかマガジンだろう）に角栄さんの伝記漫画が掲載された。その内容は立志伝にありがちなパターンで ①家が貧乏だった ②お父さんがダメ男でお母さんが立派な人だった ③吃音があっけいじめられた ④刻苦勉励して成功した ⑤ついに総理大臣まで登りつめた であるが、当然ながら私の印象に残っているのは「③吃音でいじめられた」場面である。小学校の劇（「安宅の関」だったと思う。）で主人公を演じた（級長だったから）がどもって言えずに級友にからかわれるのだが、雪の中で何回も練習して本番では見事に演じ切ったというストーリーになっていた。練習したって吃音だったら言えないセリフは言えないだろうと私はその時思ったものである。角栄さんの自伝を読むと浪花節や浪曲を練習して吃音を治したと書いているが、これは本当のことだと思う。彼は演説の名手としても有名だったがそのからがら声での話し方は浪花節の唸りそのものである。ただ、彼の演説やインタビューでの話を聞くと吃音が治ってはいなかっただろうと推測できる。言い始めの（よく真似られたが）「まあ、その～」というフレーズは吃音を誤魔化すためのものだったと言えるのではないか。田中内閣は、日中国交正常化、金大中事件、オイルショックなどに対応したが、文芸春秋誌に「田中金脈問題」を追求され、退陣に追い込まれた。総理大臣がわずか2年で交代することもあるということと、総理大臣が辞めさせられることもあるということに中学生になっていた私は驚いたものだった。ちなみに角栄さんがロッキード事件で1審有罪判決を受けながらも新潟3区から立候補したときに、角栄さんを落選させようと立ち上がったのが同じ新潟出身の作家で吃音の野坂昭弘氏だった。野坂さんに関しては別の機会にまた書いてみたいと思う。角栄さんが言友会のイベント等に出席されたという話は聞いたことはないが、もし、お願いしていたなら喜んで出席してくだらう。

吃音リアル～若者の仕事・恋愛・人生

きつおん

奈良市社会福祉協議会助成申請

吃音シンポジウム2017 in 奈良

日時：平成29年11月5日（日）
13時30分～16時20分まで
（受付13時～）

主催 奈良言友会
後援（予定）奈良県教育委員会 奈良市教育委員会
奈良県社会福祉協議会 奈良市社会福祉協議会
奈良県言語聴覚士会 全国言友会連絡協議会

会場：奈良市ボランティア・インフォメーションセンター <はぐくみセンター（奈良市保健所・教育総合センター）1階>
奈良市三条本町13番1号 ☎0742-93-8435
JR奈良駅西口より南へ徒歩約4分または近鉄新大宮駅より南東へ徒歩約16分。100円金額内かい※隣接するセンター専用駐車場が利用できます。
（会終了後無料駐車券申請可）

定員 60名

定員に達し次第、締め切らせていただきます。

対象 吃音当事者、保護者、医療・教育・福祉関係者
吃音問題に関心のある方

参加費 500円

テーマ「吃音リアル～若者の仕事・恋愛・人生」

第1部 最新の吃音事情

講師 安井 美鈴 先生
大阪人間科学大学医療心理学科
言語聴覚専攻職員、言語聴覚士

第2部 パネルディスカッション

4人の若い吃音当事者による意見表明と
フロアを巻き込んだ討論を行ないます。

第3部 グループワーク

参加者が小グループに分かれて話し合います。

開催趣旨

就職、結婚など人生の大きな節目の時期にあたる青年期は、吃音のある人にとって多くの困難に遭遇する時期でもあります。今回は吃音の若者のリアルに目を向け、シンポジウムを企画しました。これが吃音のある人にとって積極的、前向きに社会にコミットする手がかりになれば幸いです。そして、これをきっかけに、吃音のある人たちが集い、助け合い、啓発しあう場を創っていくことを目指したいと思います。

パネリスト

笠倉 毅昭氏 おおさか結言友会会長。吃音のあるST学生とSTの食所属。言語聴覚士
丸岡 美穂氏 きつおん女子の食主催。レディース・スタタリング・サークル、おおさか結言友会所属
宮脇 愛実氏 NPO法人「どーもわーく」にて就労支援に従事。ういーずたプロジェクト所属
八木 智大氏 今春、京都大学文学部を卒業。9月現在求職中

コーディネーター

斎藤 圭祐氏 全国言友会連絡協議会事務局長
国際吃音者連盟理事

□2017年度の年会費納入およびご寄附ありがとうございました。（10月現在。敬称略）

<年会費> 稲植 英和 三島 学 松本 勝利 田平 隆彦 西村 泰宏 天羽 郁子 峠谷 治美 田中 知樹
錦戸 信和 上川 二三雄 市田 浩志 澤辺 佑一 山崎 貴浩 堀 茂 後藤 文造

<ご寄附> 稲植 英和 5,000円

奈良言友会の例会

奈良言友会HP <http://nara-genyukai.jimdo.com/>

日時：毎月第1日曜日 13:30～16:30

場所：奈良市はぐくみセンター（JR奈良駅西口 南へ歩3分）

奈良言友会連絡先

堀 茂（ほり しげる。わいと年配です。）

〒636-0915 生駒郡平群町春日丘2-13-15

TEL/Fax 0745-45-2857 090-9610-6393 sigeru1030@yahoo.co.jp

青木 明大（あおき あきひろ。わいと若いです。）

[akihiro.aoki.16@facebook.com](https://www.facebook.com/akihiro.aoki.16) URL: <https://www.facebook.com/akihiro.aoki.16>

